

タマネギベと病の春季一次感染による全身症状



春季の一次感染は株の黄化、湾曲という全身症状として現れます。

今回、典型的な画像が撮れたのでお知らせします。

土壌中に被害茎葉とともに残存していた卵胞子からの一次感染によって、春季に発生するのは全身症状であり、特定の病斑を形成しません。株全体の色艶が失われ、葉は黄化、湾曲しています。

このような株にセロハンテープを押し当てて採取すると、病斑はなくとも、全身どの部位にも分生子を形成しているのが分かります（左中枠内）。表面に密生する樹枝状の分生子柄によって株の色艶が失われるものと思われます。

二次伝染すると、葉、花茎に楕円形、黄白色の大型病斑を形成し、灰白色のカビを生じます（右上枠内：タマネギの画像が無いのでネギの病斑で示しています）。

また、一次感染の全身症状株は、葉枯病菌や軟腐病菌によって二次寄生されやすく、さらに被害が拡大します。

二次寄生によって軟化腐敗した株は、例年、4月中旬から5月中旬にかけて見られています。

べと病菌の樹枝状の分生子柄（赤円内）が、葉枯病菌の俵型の分生子（青矢印）と混在したり、軟腐病菌の細菌泥（緑矢印）に埋まったりしているのが観察できます。

べと病に特化した剤だけでなく、広範囲な糸状菌に有効なマンゼブ剤や、細菌にも有効な銅剤の使用も考慮しておく必要があります。

